

『教行証文類』の文体論

—四六駢儷体に着目して—

河野 悠 玄

はじめに

私たちは文章を書く際に、少なからず時と場合や読み手を意識して文体を選択している。手紙であれば、目上の人に対しては時候の挨拶から始めて畏まった文体を採用するが、気の置けない友人にはくだけた文体で書き送る。また論文であれば、話し言葉や稚拙な表現を避けて、読者をして読むに値するものと思わしめるように努める。文体とは、内容とは別に文章の性格を左右し、品格をもたらす役目を持っているといえるだろう。

親鸞（一一七三—一二六二）の著述は漢文、漢字片仮名交じり文、漢字交じり平仮名文のほか、偈頌や今様による和讃など、用いられる文体の形式が多様である。一人の著者によるまとまった量の文献資料として貴重であるため、近年は国語学の分野から専門性の高い研究成果が多数公表されている。しかし、それらの国語学の研究成果を援用する親鸞研究は多くはなく、真宗学と国語学は隣接分野でありながら没交渉のままであると言わざるをえないのが現状であろう。

そのような状況下にあつて、能美潤史（二〇一五）は国語学の成果を援用した親鸞研究の一つとして挙げるこ

ができる。能美氏は、金子彰（一九九八）が国語学者の立場から提起した「親鸞が自筆消息の中で受信者の読解力に合わせる、日常語である和文語と専門語である漢文訓読語を使い分けたのではないか」という問題を承けて、和語聖教における和文語と漢文訓読語の用例調査を行なった⁽¹⁾。その結果、『尊号真像銘文』『浄土三経往生文類』が漢文訓読語の割合が高いのに対して、『一念多念文意』『唯信鈔文意』『三帖和讃』の和文語の使用率が高いことが明らかになった。『一念多念文意』『唯信鈔文意』は「ゐなかのひとびとの、文字のこゝろもしらず、あさましき愚癡きわまりなきゆへに、やすくこゝろえさせむとて⁽²⁾」という跋文を持ち、「三帖和讃」は「ヤワラゲホメ⁽³⁾」と左訓があるように親鸞は文体によって読み手を「こゝろえやすからん⁽⁴⁾」とする工夫や読解力への配慮を図る特徴があることを結論づけている。

親鸞における文体の選択は、読み手を細やかに意識したものであるという点に示唆を受けて、本稿で取り上げるのは、親鸞撰述の『顕浄土真実教行証文類』（以下、『教行証文類』）における文体、とりわけ四六駢儷体である⁽⁵⁾。親鸞の四六駢儷体については、その使用を指摘するものはあっても、管見の限り、小川貫式（一九六〇）を除いて先行研究がない。その小川氏の研究も四六駢儷体について一章を割くのみ概説的なものに留まる。小川氏の研究以降、日本における四六駢儷体についての国語学の一定の研究成果が認められるので、それらを援用して今一度考察する意義が存すると考えるのである⁽⁶⁾。そして従来注目されてこなかった文体論や四六駢儷体という国語学的視座が、『教行証文類』の正確な読解や著者である親鸞像の把握という真宗学の研究に資することを指摘し、今後さらなる研究を促すことを本稿の目的とする。

一、四六駢儷体について^⑦

「駢」とは二頭立ての馬、「儷」は夫婦の意味で、いずれも対になるものを指し示している。駢儷体とは対句を中心として構成される文章のことで、四字と六字が好んで用いられたので四六駢儷体といわれる。後漢・魏の時代に対句が重んじられるようになり、字数や対句の種類を整理・発展させる中に四六駢儷体は生み出され、六朝から唐代に流行し、唐代中期の古文復興運動が定着するまでは文章の主流であった。

日本においては奈良時代の『日本書紀』や平安時代初期の空海『三教指帰』に見られ、次第に隆盛を極めた。平安時代は貴族や僧侶の公的文章はもちろんのこと、唱導書や表白などにも用いられ、当時の公文書は駢儷体で書くのを要求されたという^⑧。

また大曾根章介（一九九八）は、平安期の駢儷体の四点の特徴と句型を次のように紹介している^⑨。

- (ア) 四字および六字の句を中心として文章が構成されていること。
- (イ) 音律の調和がとれていること。
- (ウ) 表現のうえで種々の技巧が凝らされていること。
- (エ) 典拠のある詞句を頻繁に用い、華美流麗な文章であること。

〔発句〕冒頭に付される句。対句にならない。

〔単句対〕計二句で構成される対句。さらに三種に分類される。

〔壮句〕三字の対句。

〔緊句〕四字の対句。

〔長句〕五字～九字以上の対句。

〔隔句対〕計四句で構成される対句。さらに六種に分類される。

〔輕隔句〕上四字、下六字。

〔重隔句〕上六字、下四字。

〔疎隔句〕上三字、下字数を限らず。

〔密隔句〕上五字以上、下六字以上、もしくは上字数を限らず、下三字。

〔平隔句〕上下とも四字、もしくは五字。

〔雜隔句〕上四字、下五・七・八字、下四字、また上下ともに四字～十二字。

〔漫句〕対句にならない句。

〔送句〕文の最後につく一字か二字の句。

〔傍句〕抑、且といった文中の接続詞の役割を持つ句。

(イ) について説明を加えると、四六駢儷体では漢詩同様に音律を調えることを求められた。漢字には平声・上声・去声・入声の四声があり、後の上去入の三声を仄声という。この平声・仄声によって音律の調和を要求される。単句対の場合は、前後の句の末尾の字の平仄を変え、隔句対の場合は、第一句と第四句、第二句と第三句の末尾の字の平仄が同じであることが規則である。一例を示せば、次の通りとなる。(平声を○、仄声を●で示す)

〔単句対〕 □ □ □ □ □ □ □ □ ○ □ □ □ □ □ □ □ ●

〔隔句対〕 □ □ □ □ □ □ ○ □ □ □ □ □ □ ●

□ □ □ □ ● □ □ □ □ □ □ ○

そもそも四六駢儷体を中国語として読まずに訓読する日本において、平仄の持つ音律的效果や技巧性は不必要なものである。しかし日本や朝鮮の漢字音では声調が脱落しているにもかかわらず、どの字が平声でどの字が仄声かを暗記するか字書で調べて漢文を書いていたという⁽¹⁰⁾。実際、日本漢文史上には平仄を完璧に調えた文章も残されており、書き手がどれほどの意識を持っていたかは揺れがあつて判然としない。特に僧侶による四六駢儷体については国語学の研究においても未解明の部分が多く、親鸞の四六駢儷体における平仄についても同様である。

(ウ) の表現のうえで種々の技巧が凝らされていることというのは、多様な対句や工夫が見られることなどを指す。これによって文章に品格や格調が備わるといえるだろう。単句対よりも技巧が必要な隔句対の方が評価され、その隔句対の中では軽・重隔句が最上、次いで疎・密隔句、そして平・雑隔句の順に評価される。

(エ)は(ウ)にやや重複するが、典拠のある言葉や表現を用いることで文章に品格や格調の付与効果を狙ったものなどを指す。卑近な例を挙げれば、現代の私たちも中国古典に典拠のある「矛盾」「完璧」などの表現を使っているが、四六駢儷体ではそれを積極的に文章作成に反映させる。典拠への意識は四六駢儷体に限った話ではないが、四六駢儷体では欠くことのできない要素である。

二、『教行証文類』における四六駢儷体

『教行証文類』における四六駢儷体は親鸞の私積部分に散見されるが、とりわけ親鸞が注力したと考えられるのが、いわゆる三序（総序・別序・後序）と呼ばれてきた箇所である。まとめて図示すると次のようになる。

■総序（『聖典全書』二・六〇七頁）（平仄は平声を○、仄声を●で示す）

〔発句〕 窃以⁽¹²⁾

〔軽隔句〕 難思弘誓 ● 度難度海大船 ○

無礙光明 ○ 破無明闇惠日 ●

〔傍句〕 然則

〔雑隔句〕 浄邦縁熟 ● 調達闍世興逆害 ●

浄業機彰 ○ 积迦韋提選安養 ●

〔傍句〕 斯乃

〔疎隔句〕 権化仁 ○ 救済済苦悩群萌 ○

世雄悲 ○ 正欲惠逆謗闍提 ○

〔傍句〕 故知

〔平隔句〕 円融至徳嘉号 ● 転悪成徳正智 ●

難信金剛信樂 ● 除疑獲証真理 ●

〔送句〕也

〔傍句〕爾者

〔長句〕凡小易修真教● 愚鈍易往捷徑●

〔漫句〕大聖一代教 無如是之德海

〔緊句〕捨穢忻淨● 迷行惑信●

〔緊句〕心昏識寡● 惡重障多○

〔長句〕特仰如來發遣● 必歸最勝直道●

〔緊句〕專奉斯行○● 唯崇斯信●

〔發句〕噫

〔平隔句〕弘誓強緣● 多生叵值●

真実淨信● 億劫叵獲●

〔緊句〕遇獲行信● 遠慶宿緣○

■別序（『聖典全書』二・六五頁）

〔發句〕夫以

〔疎隔句〕獲得信樂● 發起自如來選撰願心○

開闡真心○ 顯彰從大聖矜哀善巧●

〔傍句〕若也

〔長句〕此廻覆蔽疑網● 更復逕歷曠劫●

〔傍句〕誠哉

〔長句〕撰取不捨真言○ 超世希有正法●

〔漫句〕聞思莫遲慮

〔傍句〕爰愚禿積親鸞

〔傍句〕慶哉

〔長句〕西蕃月支聖典● 東夏日域師釈●

〔長句〕難遇今得遇● 難聞已得聞○

〔長句〕敬信真宗教行証● 特知如來恩德深○

〔傍句〕斯以

〔壯句〕慶所聞○ 嘆所獲●

〔送句〕矣

〔傍句〕然

〔緊句〕末代道俗● 近世宗師○

〔平隔句〕 沈自性唯心。 貶淨土真証。

迷定散自心。 昏金剛真信。

〔傍句〕 爰愚禿釈親鸞

〔平隔句〕

信順諸仏。 如來真説。

披閱論家。 釈家宗義。

〔長句〕 広蒙三経光沢。 特開一心華文。

■後序（『聖典全書』二・二五三～二五五頁）

〔発句〕 窃以

〔平隔句〕

聖道諸教。 行証久廃。

浄土真宗。 証道今盛。

〔傍句〕 然

〔密隔句〕

諸寺釈門昏教。 兮不知真仮門戸。

洛都儒林迷行。 兮無弁邪正道路。

〔傍句〕 斯以

〔漫句〕 興福寺学徒奏達太上天皇（号後鳥羽院諱尊成）

今上（号土御門院諱為仁）

聖曆承元丁卯歳仲春上旬之候

〔緊句〕 且至疑問。 遂出明証。

〔長句〕 誠念仏恩深重。 不恥人倫喑言。

〔長句〕 忻浄邦徒衆。 厭穢域庶類。

〔緊句〕 雖加取捨。 莫生毀謗。

〔送句〕 矣

〔漫句〕 主上臣下

〔緊句〕 背法違義。 成忿結怨。⁽¹⁴⁾

〔傍句〕 因茲

〔漫句〕 真宗興隆大祖源空法師并門徒數輩不考罪科猥

坐死罪或改僧儀賜姓名処遠流

予其一也

爾者已非僧非俗

是故以禿字為姓

空師并弟子等

坐諸方辺州

經五年居諸

皇帝（佐土院諱守成）

聖代建曆辛未歲子月中旬第七日

蒙勅免入洛已後空居洛陽東山西麓鳥部野北辺

大谷

同二年壬申寅月下旬第五日午時入滅

奇瑞不可称計

見別伝

〔傍句〕然愚秃积鸞

〔密隔句〕

建仁辛酉曆● 棄雜行兮帰本願●
元久乙丑歲● 蒙恩恕兮書選扱●

〔漫句〕同年初夏中旬第四日

選扱本願念仏集内題字并南無阿弥陀仏往生之

業念仏為本与积綽空字

以空真筆令書之

同日空之真影申預奉図画

同二年閏七月下旬第九日

真影銘以真筆

令書南無阿弥陀仏与若我成仏十方衆生称我名

号下至十声若不生者不者正覚彼仏今現在成仏

当知本誓重願不虛衆生称念必得往生之真文

又依夢告改綽空字

同日以御筆令書名之字畢

本師聖人今年七旬三御歳也

選扱本願念仏集者依禪定博陸（月輪殿兼実法

名円照）之教命所令撰集也

真宗簡要 念仏奥義 撰在于斯 見者易論

〔傍句〕誠是

〔長句〕希有最勝之華文。無上甚深之宝典●

〔送句〕也

〔雜隔句〕 涉年涉日● 蒙其教誨之人● 雖千万●
（三句対）云親云疎● 獲此見写之徒● 甚以難●

〔傍句〕爾既

〔緊句〕書写製作● 図画真影●

〔長句〕是專念正業之徳也●●●

是決定往生之徴也●●●

〔傍句〕仍

〔長句〕抑悲喜之涙● 註由来之縁○

〔傍句〕慶哉

〔長句〕樹心弘誓仏地●

流念難思法海●⁽¹⁵⁾

〔長句〕深知如来矜哀○ 良仰師教恩厚●

〔緊句〕慶喜弥至● 至孝弥重●

〔傍句〕因茲

〔緊句〕鈔真宗詮○ 撫浄土要●

〔長句〕唯念仏恩深○ 不恥人倫嘲○

〔漫句〕若見聞斯書者

〔緊句〕信順為因○ 疑謗為縁○

〔長句〕信樂彰於願力● 妙果顕於安養●

〔送句〕矣

これらの三序の対句を整理すると次のように図示できる。

対句の種類と使用回数

後序	別序	総序		
			壯句	單句
0	0	1	壯句	對
5	3	4	緊句	對
7	3	7	長句	對
0	0	1	輕隔句	隔句對
0	0	0	重隔句	
0	0	1	疎隔句	
2	0	0	密隔句	
1	2	2	平隔句	
1	1	1	雜隔句	

右図から親鸞が様々な種類の対句を用いて三序を著していることがわかる。より技巧が必要な隔句対も複数使われ、総序は別序と後序に比して隔句対のなかでも技巧に富んだ軽隔対や疎隔対が用いられることに特色が見られる。親鸞が総序の四六駢儷体に特に注意を払ったということが出来るだろう。

(ア) 四字および六字の句を中心として文章が構成されていること

三序ともに四六を中心に様々な対句を駆使されているが、特に注目に値するのは総序が前段は隔句対、中段は緊句対、後段は長句対というように対句型にも変化を加える工夫が見られる点である。同型の対句の連続は変化に欠けるが、総序はその失を意識的に免れているといえる。

また後序では、対句を形成しない漫句が長く挿入される部分が二箇所ある⁽¹⁶⁾。親鸞も連座した法然教団の弾圧である承元の法難の記事と、法然から『選択本願念仏集』の書写と真影の凶画を許可された記事である。いずれも人名や引用文を正確に記す必要がある重要な記事であるために、対句や字数の制限を受けない文章で記されたと考えられる。親鸞が四六駢儷体とそれ以外の文体との特性を考慮して柔軟に使い分けていると見ることが出来るだろう。

(イ) 音律の調和がとれていること

平仄の調和・不調和は次のように図示できるが、これがどれほどの合致率であるかの評価は、後に他の僧侶の駢儷体における平仄との比較によって行なう。

平仄の合致の度合い

後序	別序	総序		
			調和	不調和
4	3	7	調和	単句対
7	3	5	不調和	
0	1	1	調和	隔句対
4	2	4	不調和	

(ウ) 表現のうえで種々の技巧が凝らされていること

(エ) 典拠のある詞句を頻繁に用い、華美流麗な文章であること

親鸞は典拠に依りながら多様な対句を著わしている。ひとつ例を挙げると、総序の「西蕃月支聖典 東夏日域師積」では西・東と月・日の対句が見られる。特に月・日の対句は字対といい、月支・日域の意味には直接星座の月と日（太陽）は関係ないが、字の性質に依って対句を形成している。これは『浄土文類聚鈔』『帰印度西蕃論説 仰華漢日域師積』の句よりもさらに技巧が加えられているといえる。なお、「西蕃・東夏」の語は義浄『大唐西域求法高僧伝』が典拠と考えられる。

親鸞の典拠に関する傾向は、「西蕃・東夏」の語のように浄土教徒以外にも膾炙する典籍も見られるが、『教行証文類』に引用される浄土教の経論積が中心である。

三、法然門下における四六駢儷体

『教行証文類』における四六駢儷体を確認したが、同時代の他の僧侶が書いた駢儷文との比較によって親鸞の文體の特徴をより明らかにしたい。

親鸞と同時代では、入宋僧である俊苒や栄西のほか、日蓮（一二二二—一二八二）が『立正安国論』に四六駢儷体を用いている。いま『教行証文類』と比較するにあたっては、同じ法然門下という共通点のある敬西房信瑞（？—一二七九）の諸著作と聖覚（一一七六—一二三五）の「聖覚法印表白文」を取り上げる¹⁸⁾。

信瑞は長楽寺隆寛と法蓮房信空の弟子で、浄土教関連の『明義進行集』『広疑瑞決集』のほか、俊苒の伝記である『泉涌寺不可棄法師伝』、音義書である『浄土三部経音義集』を著した。親鸞がこれらの信瑞著作を閲覧したかは判断しかねるが、同時代の法然門下であり、比較対象として適当と考える。また信瑞著作の四六駢儷体については前島信也（二〇二二）が句型の分類や平仄の合致の度合いなどを検討しているので、本稿はその成果を依用する。詳細は本書を参照されたい。

聖覚は親鸞が晩年まで敬慕した人物として知られ、その父、安居院流澄憲も多くの四六駢儷体の表白文を残している。「聖覚法印表白文」は聖覚が法然の六七日法要に際して制作された表白文といわれているが、法然在世中とする見解もある。この表白文は真宗高田派専修寺蔵の『見聞集』所収の『唯信鈔』の奥書から尾題までの間に親鸞が書写している。奥書に「文暦二歳 乙未 六月十九日 愚禿親鸞書之」とあることから、同年三月の聖覚示寂の報に接して親鸞が認めたものと考えられる。また親鸞は『尊号真像銘文』で註釈を施している。

■「聖覚法印表白文」(『聖典全書』二・九七〇、九七一頁)

〔発句〕夫

〔雑隔句〕根有利鈍者● 教有漸頓●
機有奢促者● 行有難易●

〔傍句〕当知

〔雑隔句〕聖道諸門(者)⁽¹⁹⁾漸教也● 又難行也●
浄土一宗者頓教也● 又易行也●

〔傍句〕所謂

〔雑隔句〕真言・止観之行○ 猿猴情難学●
三論・法相之教● 牛羊眼易迷○

〔傍句〕然至我宗者

〔軽隔句〕弥陀本願● 定行因於十念●
善導料簡● 決器量於三心○

〔雑隔句〕雖非利智精進● 專念実易勤○
雖非多聞広学● 信力何不備●

〔傍句〕况

〔雑隔句〕論滅罪之功力● 消五逆於称名之十声○
談生善之徳用● 極十地於順次之一生○

〔傍句〕依之

〔密隔句〕濁世之凡夫● 横截五趣之昏衢○
末代之愚士● 豎極九品之階級●

〔傍句〕然我大師聖人

〔平隔句〕為积尊之使者● 弘念仏之一門○
為善導之再誕● 勸称名之一行○

〔重隔句〕專修專念之行○ 自此漸弘○
無間無余之勤○ 在今始知○

〔傍句〕然則

〔雑隔句〕破戒罪根之輩● 加肩入往生之道●
下智浅才之類⁽²¹⁾ 振臂⁽²²⁾赴浄土之門○

〔傍句〕誠知

〔雑隔句〕无明長夜之大灯炬也● 何悲智眼闇●
生死大海之大船筏也⁽²³⁾ 豈煩業障重●

〔傍句〕爰法主

〔漫句〕幸依上人化導大信彼仏本願
浄土往生敢不殘疑

弥陀来迎只專憑者歟

〔傍句〕 豈回

〔輕隔句〕 悠悠生死(24) 以今生為最後

漫漫流轉 以此身為際限

〔漫句〕 情思教授恩德 実等弥陀悲願者歟

〔長句〕 粉骨可報之。 摧身可謝之(25)

〔傍句〕 依之

〔平隔句〕 報恩齋会 修於眼前
 値遇願念 萌於心中

〔傍句〕 願

〔雜隔句〕 弥陀如来 善導和尚 鑑信心垂哀愍

〔三句對〕 大師上人 同学等侶 照懇志致隨喜(26)

〔長句〕 自他同往生極樂界

師弟共奉仕弥陀仏

〔平隔句〕 蓮華初開之時 先悟今日之縁

引接結縁之夕 必導今日之衆(27)

※紙数の都合上、信瑞の諸著作の四六駢儷体については前島〔二〇二一〕を参照されたい。

以下、各著述の駢儷文を①から⑤に配当し、図示する。

① 信瑞『浄土三部経音義集』の序文

② 信瑞『浄土三部経音義集』の跋文

③ 信瑞『泉涌寺不可棄法師伝』末尾の贊文

④ 信瑞『広疑瑞決集』の序文

⑤ 聖覚「聖覚法印表白文」

対句の種類と使用回数

聖覚 ⑤	信 瑞					
	④	③	②	①		
0	0	0	1	0	壮句	単句対
0	4	12	3	13	緊句	
2	2	9	7	11	長句	
2	0	1	0	0	軽隔句	隔句対
1	0	0	0	0	重隔句	
0	0	0	0	0	疎隔句	
1	0	0	0	0	密隔句	
3	1	1	0	1	平隔句	
8	0	2	0	8	雑隔句	

平仄の合致の度合い

聖覚 ⑤	信 瑞					
	④	③	②	①		
0	4	10	10	19	調和	単句対
2	2	10	1	5	不調和	
1	1	1	0	5	調和	隔句対
14	0	4	0	4	不調和	

比較によってわかるのは、信瑞は単句対が多いのに対して、聖覚は隔句対を非常に多用する。親鸞は聖覚ほどではないが同傾向と位置づけることができる。信瑞が単句対と隔句対のいずれも長文の句を多用するのは信瑞個人の特徴という可能性もあるが、山本真吾（二〇〇六）が平安時代の表白や願文を調査し、時代が下がるほど句の長文化が見られるという指摘と符合する。信瑞が聖覚と親鸞よりやや四六駢儷体の習得時期が下るためという可能性も考えられる。

また信瑞は漢籍などの外典を典拠に多く用いるのに対して、聖覚と親鸞はその傾向が見られず、浄土教関連典籍が中心である。

なお、平仄に関しては、聖覚はほとんど合致していないことがわかる。信瑞は、比較的合致するものもあるが、前島（二〇二一）が「厳密ではない」と評価するように、意識的に平仄を揃えていたとはいえない。ゆえに信瑞と比較的傾向が似ている親鸞における平仄についても判断は留保せざるをえない。これは、親鸞が諸著作で声点を加えて清濁を厳密に区別していたという音声への意識⁽²⁹⁾と一見すると矛盾するように思われるが、同時代の四六駢儷体と対照することで当時の僧侶の日本漢文において平仄の合致がそれほど重要ではなかったと結論づけられるだろう。

四、親鸞の文体論が示す親鸞像

親鸞が書き手として四六駢儷体で対句に大きな注意を払っていたことが知られることで、逆に前景化するのが読

み手としての親鸞像である。親鸞は『教行証文類』に膨大な経論釈を引用する中で自ら訓点を付し、時に一般的な読み方とは異なる読解を示す訓点が見られる。この独特な訓点をめぐっては、単に親鸞にとって自然な読み方であったと考えられるものも混在するため、親鸞の意図が介在するか否かは判断がつかない場合がある。

一例を示すと、次の「証文類」の『往生論註』引文である。

法身無像而殊形並応至韻無言而玄籍弥布冥権無謀而動与事会

これは菩薩莊嚴功德成就釈の僧肇の『註維摩経』からの引用文であるが、通常は、

法身は像無くして殊形並びに応ず。至韻は言無くして玄籍弥く布けり。冥権謀無くして動じて事と会うと。

〔聖典全書〕一・五一五頁、書き下し筆者)

と、三句の対句として読むべき箇所であるが、親鸞は対句を崩して、

法身は像なくして形を殊にす、並びに至韻に応ず。言無くして玄籍弥布き、冥権謀無くして動じて事を会すと。

〔聖典全書〕二・一四二頁、書き下し筆者)

と訓じている。この箇所を殿内恒(一九九六)は、通常であれば、法身・至韻・冥権を同格として、真如そのもの

がはたらく具体的な相を三通りの角度から示したと考えられるが、親鸞は対句で読まないことで、法身が全体の主語となり、至韻は法身のあらわれの一つに位置づけられ、至韻のあらわれと示されていた玄籍も、法身のあらわれとなる。そして冥権以下は、法身のありようを総じたものと見ることができると解釈している。

殿内氏は論文の冒頭で「今は、親鸞の意図が込められていたか否かを問うことなく⁽³⁰⁾」と親鸞の独特な訓点在意図的なものを括弧に入れて示しているが、脚注において「この「至韻」をいま仮に名号と見れば、法身が「形を殊に」し、かつ「至韻に応ず」と示すこの文は、いわゆる垂名示形の義を示さんとしたものと見ることができると見られる⁽³¹⁾」と親鸞の意図的な訓読の可能性を示唆している。いま親鸞の意図が介在するものと見るならば、晩年の和語聖教に見られる二種法身説と同様な法身観や名号観がすでに『教行証文類』に垣間見えるということができると見られる。

本稿で明らかになったように、親鸞が書き手として四六駢儷体で対句を使いこなす漢文作成能力を持っていたことを考慮すると、読み手の親鸞がこの対句を読み誤ったという蓋然性は少しく低下し、意図的に対句を崩して読んだとする説を傍証することができるといえよう。もちろん、文章から著者の意図を完全に読み取することは不可能な行為であるが、書き手としての親鸞の能力を視座に据えて『教行証文類』を読解することは、時に従来の説の一助となり、時に再考を促すことができると考えるのである。

五、四六駢儷体を考慮した読解の可能性

すでに確認してきたように四六駢儷体は、文字数の制限や対句などの修辞上の制約の範囲内で表現する文体であった。そこに着目して文章読解の可能性を示したものに文珠四郎琢磨（二〇二三）がある。文珠四郎氏は、親鸞の「機」の用例として従来から真宗学において「受法の機」とされてきた概念の妥当性を検証し、疑義を呈している。受法の機とは「機」の一語で信心そのものを指す、あるいは他力信心の念仏者を指すという解釈である。この前者の解釈が、仏教一般における「機」が教法の対象を意味する概念であることと乖離するのであるが、親鸞独自の解釈であるとしてその独自性が他宗派の解釈への超勝性と同一視されてきたきらいがある。

従来の説の論拠となっていたのが、「行文類」二教二機対の「金剛信心絶対不二之機」（『聖典全書』二・五八頁）であった。しかし当該箇所は念仏と諸善の対論と機についての対論のまとめ箇所が呼応するように四六体で対句している。

斯義如斯

〔傍句〕然

按本願一乘海

円融満足

極速無礙

絶対不二之教

〔送句〕也

斯義如斯

〔傍句〕然

按一乘海之機

金剛信心

絶対不二之機

〔送句〕也

文珠四郎氏は、右のように四字と六字による対句を意識しているがために、「金剛信心絶対不二之機」となっているのではないかと、機||信心と読む解釈に対して再考を促している。修辞上の制限がなければ、「金剛信心之機絶対不二之機」と「之機」を繰り返すことができたが、ここでは冗長ではあるから省略されていると考えられると述べる。あるいは「獲得金剛信心 絶対不二之機」とも考えられよう。そうであるならば、機||信心という仏教一般と乖離が見られる解釈を回避することができる。もちろん親鸞独自の解釈が浄土真宗の教学形成に大きく寄与している面もあるが、親鸞はあくまでも仏教の枠組みの中で浄土真宗を「大乘の中の大乘」と標榜しているのである。後の学者が誤読によって親鸞教義を仏教の枠外におくことはあってはならない。親鸞の著述に仏教学との乖離が見られる用例があり、それが著述全体を通してわずかである場合、四六駢儷体の修辞上の制約の問題を孕んでいる可能性を考慮に入れる必要があるだろう。文珠四郎「二〇二三」は、その可能性をひとつの傍証としながら考察する意義を提示した重要な論考と考える。

六、親鸞の四六駢儷体の習得時期

さて親鸞は四六駢儷体をいつ頃に習得したのだろうか。小川貫弑「一九六〇」は叡山時代より下るのではないかと推測し、⁽³²⁾具体的には東国滞在期の一切経校合等によって宋代文化を受容したのが絶好の機会だったのでないかと推定していた。

しかし、小川説は再考の必要がある。というのも小川氏は、四六駢儷体を宋代文化受容の影響であると想定して

いるが、前述したように四六駢儷体は六朝時代頃に隆盛を極め、宋代には唐代に起こった古文復興運動が続き、四六駢儷体は古文にその場を奪われて衰退の一途をたどっている。そして日本に流入してきたのは宋代よりはるか前に遡る。小川氏の想定は、「親鸞は入宋僧の榮西や俊芴につづいて四六の文章を書いた人であるが、それは禪四六の勃興するより以前、鎌倉前期における珍しい存在でなかろうかと思う」とあるように、室町時代に禅宗の五山文学が四六駢儷体を多用する以前は、僧侶が四六駢儷体を用いることは稀有であり、入宋僧独自の文体であるという前提に立脚していた。しかし、入宋僧ではない聖覚が親鸞と同傾向の四六駢儷体を著していたように、当時の仏教界、少なくとも叡山などの親鸞の活動範囲では決して珍しい文体ではなかったと考えられる⁽³⁴⁾。

それゆえに親鸞の四六駢儷体は、自筆の『教行証文類』坂東本に早くは六十歳頃（後序）の前期筆跡から八十三歳頃の後期筆跡（総序・別序）まで見られる⁽³⁵⁾ことに鑑みても、六十三歳頃の一切経校合や帰洛後の泉涌寺参学の可能性などではなく、叡山時代などの青年期から壮年期、つまり比較的早い時期に習得して晩年まで使い続けたものと考えるべきであろう⁽³⁶⁾。

小結

以上、近年の国語学の成果を援用しながら文体論という視座のもと、『教行証文類』の四六駢儷体の考察を行ってきた。著述によって様々な文体を使い分ける親鸞が『教行証文類』では四六駢儷体という文体に大きな注意を払っていることを提示し、その特徴を明らかにした。それらを踏まえることで、漢文の読み手としての親鸞像の把

握や従来の『教行証文類』の読解に対して再考を促す可能性を例示した。

また、四六駢儷体は決して親鸞独特なものではなく、同時代の法然門下の僧侶にも見られ、その文体の傾向に差異はあるものの法然門下内でも共有された文体であったことを紹介した。親鸞が四六駢儷体の典拠とした典籍が、外典ではなく専ら仏教典籍の、とりわけ浄土教典籍であったことは、親鸞が四六駢儷体の読み手にどのような人物を想定していたのかを暗示しているのかもしれない。親鸞が四六駢儷体を誰に向けて、なぜ『教行証文類』に積極的に用いたのかについては稿を改めて論じたい。

(註)

(1)平安時代の日本語では和文語と漢文訓読語とが対立的に存在しており、同義語であっても「ようなり」(和文語)と「如し」

(漢文訓読語)、「されば」(和文語)と「しかるに」(漢文訓読語)のように文体の差によって使い分けられた。金子氏の指摘は、親鸞が消息の中で漢文の素養を持つ者には漢文訓読語を使用し、そうでない者には和文語主体で書き送ったのではないかというものであった。金子氏は親鸞の自筆消息の数が少ないために断定を避けていたが、能美氏が和語聖教にも同様の傾向があることを確認したことで、親鸞が読み手を配慮した著述態度を有していたと結論づけられるものになっている。詳細は両氏の論考を参照されたい。

(2)『聖典全書』二・六七八頁、七一六頁。

(3)『聖典全書』二・三八六頁中。

(4)『聖典全書』二・六七八頁、七一七頁。

(5) 『浄土文類聚鈔』にも四六駢儷体は見られるが、本稿では四六駢儷体が多く見られ親鸞の名著と目される『教行証文類』に対象を絞って考察を行なう。

(6) 中国漢文の修辭法である四六駢儷体を「国語学」として言及している点に違和感を覚える読者がいるかもしれないので、あえて説明を付しておく。

もともと四六駢儷体は中国において成立した文体であるが、親鸞の四六駢儷体は日本語話者が日本語話者を読者として書いた日本漢文である。中国漢文の常識でその巧拙や規則性などを考究すると、親鸞の四六駢儷体の特色や意図を見落とすことになる。あくまでも平安後期から鎌倉時代にかけて中国への留学経験のない人物が日本で書いた漢文という文脈において同時代の状況と照らして考えるべきであろう。

また、漢文研究に関しては中国漢文が正統であり、日本漢文はそれに比して軽視され、国語学では和文研究が中心で漢文研究が遅れてきた状況がある。日本漢文学における四六駢儷体の研究も本稿が多大な恩恵を蒙っている大曾根章介氏の研究を待たねばならなかった。これが今まで親鸞の四六駢儷体について先行研究がほとんどなかった原因のひとつと考えられる。ゆえに大曾根氏に先立つ小川氏の研究とその内容は瞠目に値するものであり、本稿執筆の契機となった。敬意を表して小川説を紹介し修正することが本稿の目的のひとつである。

(7) 本章の四六駢儷体の概説は大曾根章介（一九九八）による。

(8) 大曾根章介（一九七四）によれば、対句の巧拙が文章の評価に一致していたために、平安時代の人々は藤原明衡が美文を蒐集して編纂した『本朝文粹』などを座右に置いて作文を行なったと考えられるといわれている。しかし江戸時代に事情は一変し、儒学者を中心に、修飾に走る四六駢儷体は否定されるようになり表舞台から姿を消した。『教行証文類』が漢籍に精通し高い漢文作成能力のあった江戸期の宗学者たちによって研鑽されたのにもかかわらず、四六駢儷体へ注意が払われず具

体的な研究が見られないのは、当時の四六駢儷体の評価の低さに起因すると考えられる。

(9) 大曾根章介「一九九八」四七四～四七五頁。句型に関しては、前島信也「二〇二一」が上記の大曾根氏を踏まえて整理している凡例を依用した。

(10) 金文京「二〇一〇」一七九～一八〇頁。

(11) 詳しくは山本真吾「二〇〇六」参照。

(12) 総序と別序の発句である「窃以」は、講録などで善導の『観経疏』「玄義分」を出拠と挙げ、善導への思慕が強調されることがあるが、同時代の四六駢儷体を参照すると頻出の単語である。『作文大躰』『天理図書館善本叢書和尚書之部 第五十七卷平安詩文残篇』、八木書店、一九八四年）一九頁の発句の例に確認できるほか、山本真吾「二〇〇六」所収の翻刻にも用いるが、親鸞と時代を大きく隔てない存覚が『六要鈔』で単に「発端之言」『聖典全書』四・一〇〇〇頁）と解説し、善導に言及していないように、当時の語彙や四六駢儷体の通例に倣ったという視点も見落とされてはならない。むしろ親鸞と同時代の四六駢儷体へ視野を広げること、親鸞の単語選択の理由や背景を垣間見ることができるといえる。

(13) 義浄『大唐西域求法高僧伝』「於是巡涉西蕃而東夏」『大正蔵』五一・一頁下)

(14) 『無量寿経』「忿成怨結」『聖典全書』一・五八頁)

(15) 玄奘『大唐西域記』「樹心仏地流念法海」『大正蔵』五一・八八七頁上)

(16) 古田武彦「一九八五」は、後序の「窃以」の発句で始まる形式や「今上」とされる土御門天皇について、また「平出」書式や文色が大きく異なることを根拠に、後序の冒頭から「慶哉」の前までの部分を別時期に著された親鸞の初期文書からの引用と見ている。(五〇三～五五九頁) 四六駢儷体という観点からは、漫句に関しては古田氏が指摘するように別時期の文書

の挿入という可能性は大いにありうると考えられる。しかし「窃以」→「註由来之縁」とそれ以降の文章とが趣を異として
いるとは断定できない。この問題については今後の課題としたい。

- (17) 『聖典全書』二・二六一頁。
- (18) 文章の役割の異なる教義書の文と表白文とを無批判に同じ組上で論ずることへの難は避けることができないが、「聖覚法印
表白文」は親鸞が確実に目を通した四六駢儷体であるという点、今回扱う『教行証文類』の三序がいずれも執筆の経緯や仏
や祖師への讃嘆といった表白文に重なる役割を担っている点に鑑みて比較対象に挙げた。
- (19) 次の句と対偶を為しているので、「者」が脱字していると考えられる。
- (20) 法照『浄土五会法事讚』『不簡破戒罪根深』(『聖典全書』二・三九頁)
- (21) 『同右』『不簡下智與高才』(『聖典全書』二・三九頁)
- (22) 『文選』李陵「振臂一呼」
- (23) 『漢語灯録』『大経釈』『以智慧船筏渡生死大海』(『聖典全書』六・二九六頁)
- (24) 白居易「長恨歌」「悠悠生死別經年」
- (25) 善導『観念法門』『劫畧劫粉身碎骨報謝仏恩由来称本心』(『聖典全書』一・八九六〜八九七頁)
- (26) 慧皎『高僧伝』『致隨喜』
- (27) 源信『往生要集』大文第二「蓮華初開樂」・「引接結縁樂」(『聖典全書』一・一〇四七頁)
- (28) 前島信也〔二〇二二〕二〇〇頁。
- (29) 佐々木勇〔二〇二二〕四〇頁。
- (30) 殿内恒〔一九九六〕一五一頁。

(31) 殿内恒 (一九九六) 一五三頁。

(32) 小川氏は、先行研究に親鸞の四六駢儷体は日野家の家学の素養とするものがあるとして藤堂祐範 (一九三〇) 『浄土教版の研究』を挙げるが、そのような指摘を確認することはできなかった。

(33) 小川 (一九七三) 四六〇頁。

(34) ただし、信瑞は法然門下でありながら俊苒の影響も受けているので、親鸞も信瑞のように泉涌寺を通して宋代仏教文化の影響に依ったとする説も完全には否定できない。しかし四六駢儷体を用いる親鸞が「鎌倉前期における珍しい存在」という評価は訂正の必要がある。

(35) 重見一行 (一九八一) 二二一・二九九頁。

(36) 日野家の修学が影響するかはさらなる検討が必要だが、関東の漁村出身である日蓮が『立正安国論』で四六駢儷体を使用していることから、出自や幼少期の修学環境ではなく比叡山で習得することができたと考えるのが妥当と筆者は推定している。

参考文献

小川貫弑 (一九六〇) 「親鸞聖人にみる宋朝文化の種々相」(『龍谷大学論集』三六五・三六六号)

(↓一九七三) 『仏教文化史研究』永田文昌堂

大曾根章介 (一九七四) 「四六駢儷文の行方」(『季刊文学・語学』七〇号)

(一九九八) 『大曾根章介 日本漢文学論集 一』汲古書店

重見一行 (二九八二) 『教行信証の研究―その成立過程の文献的考察―』法藏館

古田武彦 (二九八五) 『親鸞思想―その史料批判』富山房

殿内 恒 (二九九六) 「親鸞聖人の証果論についての一考察―「証文類」の転訓箇所を中心に―」(『行信学報』通刊第九号)

金子 彰 (二九九八) 「鎌倉時代の仏教者の語彙について―法然と親鸞の仮名書状に見られる和文語と漢文訓読語―」

(『東京女子大学比較文化研究所紀要』五九号)

山本真吾 (二二〇六) 『平安鎌倉時代に於ける表白・願文の文体の研究』汲古書店

金 文京 (二二〇一〇) 『漢文と東アジア―訓読の文化圏』岩波書店

能美潤史 (二二〇一五) 「親鸞聖人の表現に関する一考察」(『真宗学』一三二号)

前島信也 (二二〇二二) 『敬西房信瑞の研究』法藏館

佐々木勇 (二二〇二二) 「親鸞聖人の漢文訓読」(『浄土真宗総合研究』一四号)

文珠四郎琢磨 (二二〇二三) 「真宗学における「受法の機」概念に対する若干の疑問」

(『真宗学』一四七号掲載予定、龍谷大学真宗学会第七十六回大会発表)